

氏名	陳 金		
ヨミガナ	チン キン		
学位の種類	博士（音楽）		
学位記番号	博第 21 号		
学位授与年月日	2024 年 3 月 16 日		
学位論文題目	ウジェーヌ・イザイ：6 つの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》 作品 27—「ラヴェルニュー自筆譜」の検討から読み解く、その創作過程—		
博士論文審査委員会	（主査）	教授	荒井 英治（ヴァイオリン）
	（副査）	教授	藤田 茂（音楽学）
	（副査）	教授	武石 みどり（音楽学）
	（副査）	准教授	岡島 礼（ソルフェージュ）
	（副査）		池原 舞（音楽学） （桐朋学園大学院大学准教授）
博士演奏等審査委員会	（主査）	教授	荒井 英治（ヴァイオリン）
	（副査）	教授	大谷 康子（ヴァイオリン）
	（副査）	教授	ドミトリー・フェイギン（チェロ）
	（副査）	教授	佐藤 俊（ピアノ）
	（副査）	教授	志村 文彦（声楽）
	（副査）	教授	糀場 富美子（作曲）
	（副査）	教授	藤田 茂（音楽学）
	（副査）		渡辺 和彦（音楽評論家）

## 審査結果の要旨

### 1. 博士論文審査委員会

日 時	2024年2月7日（水）10時00分～12時30分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパスC305
判 定	合
審査結果の要旨	<p>陳金の博士論文は、ウジェーヌ・イザイの《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》について、近年に公開されたラヴェルニュ自筆譜を仔細に検討することで、これまで謎に包まれていた、この作品の創作過程の一端を明らかにするものである。</p> <p>研究期間がコロナ禍にかかったこともあり、基礎資料であるラヴェルニュ自筆譜の製本状態を確認するに至らなかったことは残念であり、今後のさらなる研究が待たれるところではある。しかし、本論文は、現資料状態から、複数の読みの可能性を検討しているため、一定の客観性を担保しつつ、多くの読者が納得するであろう仮説を打ち出している。</p> <p>言い回しに不自然さが残るところ、また、推論が勇み足になるところも認められるが、DMAの論文としては労作であり、「一夜のうちにスケッチされた」という風説を覆しつつ、《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》に幾重にもつらなる熟考の過程があったことを明らかにした点で、本論文は評価に値する。とりわけ、もっとも複雑な創作過程が記録されている曲として最後に論じられる〈第5番ソナタ〉の初期構想と完成稿の大きな差異は、本論文の発見のなかでも、とりわけ重要なものであり、この曲の今後の解釈にも影響を与えるものであった。また、イザイの独特の紙面の使い方、また、作曲家のスペルを用いて推敲のあとを記しておく、イザイ独特の記憶術など、《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》の範囲を超えて、今後のイザイ研究の基礎となるような発見も、本論文には含まれている。</p> <p>審査会における質疑応答では、スケッチ研究に関わる原理的な問いもなされた。それらに応答するメタレベルの思考を鍛えていくことは、今後の陳金の課題としてあるが、すべての質問に対する誠実な応答からも、陳金が、すでに自立した研究者・演奏者として、十分なスタートを切り得たことを認め、審査委員は、合格の判定をした。</p>

## 2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2022年11月10日(木) 14時30分～15時55分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判 定	意欲的なプログラミングと演奏内容の充実が総合的に高く評価された。
審査結果の要旨	<p>陳金の一貫した研究課題であったウジェーヌ・イザイの代表作である6曲からなる『無伴奏ヴァイオリン・ソナタ』、その中で最高難易度である第1番を冒頭に据え、耳にする機会に恵まれないチェロとの二重協奏曲＝『ポエム・ノクテュルヌ』に挑み、さらに締めくくりとして選んだ言わずと知れた名作、フランクの『ヴァイオリン・ソナタ』を置いた重厚なプログラムを臆することなく、自身の持ち得る力を存分に発揮していた、と言える。</p> <p>審査員各氏からは、技術面、表現面、そしてピアノやチェロとのアンサンブルの観点からも高いレベルを維持していて、聴き応えのある演奏が聴かれた、90分という時間が短く感じられた、との感想も出された。</p> <p>個々に触れていくと、</p> <p>『無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第1番』においては、良く弾き込まれている上に、気迫に満ちた表現が好印象となった。また、陰影のコントラストもあり、立体感のある表現と評価された。一方、内在するハーモニー感やポリフォニックな処理について、また、緊張感の持続には多少苦勞していたのでは、との声も聞かれた。</p> <p>『ポエム・ノクテュルヌ』では、技術的にはチェロ共々ヴィルトゥオジティの極限まで踏み込んだ感があり、さらに世紀末の香りが濃厚なこの作品を「モノ」にすること自体が困難であろうにも関わらず、作品そのものの魅力を伝えることが出来たレベルであったのでは、と評価された。弦同士の複雑なハーモニーの音程も良く合わせ、呼吸感も揃い、高度なアンサンブルを実現していた。長い単一楽章のドラマを大きい起伏を持ってまとめあげていた。他方、陰影をもっと出せたのではないか、繊細さにおいて充分であったか、という疑問も聞かれた。</p> <p>フランクの『ヴァイオリン・ソナタ』は有名曲であり、聴く側の耳も肥えているだけに弾くこと自体が大きな挑戦である。表現の深さは言うに及ばず、些細なミスも耳に残り易い。事実、疲労感も手伝ってか、特に難所ではない個所で音程の不安定さが露呈されたの残念だった。また、音色の変化や表現の深さにおいて、もう一步届かなかった面があったのでは、という指摘もあった。しかし、ピアノの秀逸なサポートもあり、バランスも大変よく、両者の対話が良く感じ取れた、との高評価が与えられた。更には、慣習にとらわれないで楽譜を正確に読み込んだ解釈も見られ、名演奏！とのお褒めの言葉も頂戴した。</p> <p>陳金が大学院生の頃から現在に至る道程で、大きな成長が見られたのは嬉しいことである。と同時に、尚も未熟と言える点は幾つか指摘できる。しかしこれからの伸びしろを考えると将来への期待は充分であり、今後もさまざまな機会を通じて指導していければと思っている。</p>

	<p>尚、チラシと配布プログラムで、Franck の綴りを間違えていたことは付記しておく。</p>
--	---

以上。

文責 荒井英治

以上